

頬に触れる冷たさで、私は目を覚ました。

最初に視界に入っただのは、見たこともないような高い天井だった。乳白色の大理石に、細やかな金の蔓草模様が彫られている。天井から吊り下げられた巨大なシャンデリアには、青白く輝く宝石のようなものが嵌め込まれていて、それが室内を昼間のように明るく照らしていた。

ここは、どこ？

寝起きの頭でぼんやりとそう思いながら、私はゆっくりと身を起こした。背中の下にあるのも大理石の床で、ひんやりとした感触が薄い布越しに伝わってくる。布、と思って自分の身体を見下ろし、息を呑んだ。

白い、薄絹のような長衣を身につけている。胸元には複雑な文様の刺繍が施され、腰には金糸の帯が結ばれていた。昨夜、寝るときに着ていたはずのよれた部屋着ではない。素肌に直接、見覚えのない衣を着せられてい

る。布越しに自分の身体の輪郭がうつすら透けるほど薄い生地で、無意識に胸元を手で押さえる。

心臓が、嫌な音を立て始めた。

夢、ではない。頬を抓ってみるまでもなく、それは確信できた。床の冷たさが太腿を通じてはつきりと伝わってくる。鼻の奥に届く、知らない香りの粒。指先がほんのわずかに震えていることすら、生々しい現実感を持つて感じられる。

ぐるりと部屋を見回す。

壁面には、見たことのない文字が彫り込まれた石板がいくつも嵌め込まれていた。床には、私を中心にして大きな魔法陣のようなものが描かれている。直径は、たぶん十メートル近くあるだろう。光を失った蠟燭が、円の縁に沿ってきっかり七本立てられていた。半分以上が、燃え尽きて溶け

落ちている。

「お目覚めになられましたか、聖女様」

頭上から降ってきた声に、私はびくりと肩を震わせた。

顔を上げる。

そこには、白を基調とした長いローブをまとった人々が、ぐるりと円を描くように立ち並んでいた。十数人はいるだろうか。年齢も性別もばらばらだが、誰もが厳粛な面持ちで私を見つめている。先ほど声をかけてきたのは、その中でも一番奥にいる、白い髭を蓄えた老人らしかった。

「聖女様、ようこそおいでくださいました」

「異界の救い主に、心からの歓迎を」

「祈りが、ようやく届きました」

次々と声上がる。私は何度も瞬きをした。何が起きているのか、まっ

たく理解できない。

「あ、あの……」

ようやく出た声は、自分でも情けなくなるほど掠れていた。

「ここは、どこですか？ どうして私、こんなところに……」

名乗らなければと反射的に思った。会社で叩き込まれた習慣だ。

「私、高瀬詩織といいます。二十五歳で、会社員で……昨日は普通に会社から帰って、夕食食べて、お風呂入って寝たはずで」

言いながら、自分でも何を言っているのかわからなくなってくる。長老らしき老人は、深く頷いた。

「ご混乱はもつともです、シオリ様。落ち着いてお聞きください。ここはオストラリア神聖王国、王都中央神殿の召喚の間にございます」

オストラリア。神聖王国。召喚の間。

頭の中で言葉だけが空回りする。

「私どもは魔導士団と神官団の合同で、半年もの間、儀式を続けてまいりました。世界を救う聖女を、異界よりお呼びするために」

「世界を、救う……」

「左様にございます」

長老は片膝をつき、皺の刻まれた手を胸に当てた。周囲の神官たちもそれに倣い、いっせいに跪く。一糸乱れぬ動きが、かえって現実味を奪っていく。

「我が国は、いえ、この大陸全土が、北方より侵攻する魔王軍の脅威に晒されております。聖女の御力なくして、この危機を乗り越えることはできません。どうか、お力をお貸しください」

立ち上がろうとして、足に力が入らないことに気づいた。震えている。

寒さからではなく、たぶん、これは恐怖からだ。

冗談だと笑い飛ばせるならどんなに良かったか。けれど、目の前の人々の真剣な表情、肌を感じるこの空気の違い、嗅いだことのないお香の匂い、何もかもが現実だと告げていた。お香に混じって、ほんのりと薬草のような甘い香りもする。日本のお寺ともお葬式とも違う、もっと甘く、もっと厳かな匂い。

「あ、あの……でも、私……」

言葉に詰まる。

救えるはずがない、と言いそうになった。私はただの普通の〇だ。残業に追われて、月末になると貯金残高に怯えて、休日はベッドで動画を見て過ごすような、本当にどこにでもいる人間。世界を救うなんて、そんな大それたこと、漫画やゲームの中だけの話だ。

でも、それを口にする前に、長老が穏やかに首を振った。

「ご不安はわかります。まずは、御身に宿る聖力を確認させてくださいませ」

「せいりよく……」

「聖魔法、と申し上げた方がわかりやすうございますか。お試しください。まずか。ご自身の手のひらをじっと見つめて、光が宿るよう、念じてみてください」

言われるがままに、私は震える両手をそろそろと前に差し出した。手のひらを上に向ける。じっと、見つめる。

光が、宿れ。

念じる。

……何も、起きない。

手のひらは、見慣れた自分の手のひらのままだった。爪の形も、薬指の小さな傷も、先週うっかりホチキスで切ってしまったところも、すべて昨日と同じ。

もう少し強く念じてみる。光、光、光。額にじっと汗が浮かぶほど集中する。眉間にまで力が入る。手のひらをいっぱいに広げて、指先まで意識を行き渡らせるようにする。子どもの頃に観たアニメの主人公の真似まですてしまう自分が、情けなくて仕方がない。

それでも、何の変化もなかった。

しん、と神殿の中が静まり返る。私の浅い呼吸の音だけが、やけに大きく響いた。

神官たちの顔から、徐々に表情が抜け落ちていくのが見える。歓喜と希望に満ちていたはずの瞳に、戸惑いと、そして失望のような色が滲んでい



く。視線が刺さるように痛い。

「ま……まさか、召喚に失敗を……？」

「いや、しかし神託では確かに……」

「もう一度、もう一度試していただいては……」

ざわめきが広がる中、私は身を縮めるしかなかった。期待されていることはわかる。それに応えられないことも。何度試しても、結果は同じだった。手のひらは静かなまま。光のひとかけらすら宿らない。

胸の奥が、ぎゅうっと締めつけられる。

ごめんなさい。私、たぶん、皆さんが呼びたかった人じゃないんです。

声に出せないまま、唇だけが動く。

長老が、絞り出すような声で告げた。

「念のため……特殊検査を、行いましょう」

「特殊、検査？」

「奥の聖室にて。シオリ様、どうかこちらへ」

神官の一人がそっと手を差し伸べてきた。骨ばった、けれど温かい手だった。私はその手を取って、ようやく立ち上がる。膝が笑っているのを、必死で隠した。

神殿の奥へと続く長い廊下を歩きながら、私は唇を噛む。

肌に触れる衣の感触が、歩くたびにすべてを意識させる。こんな薄い布一枚しか身につけていない状況で、見知らぬ人々に囲まれて、見知らぬ場所を歩いている。普段の私なら、絶対にあり得ない状況だ。会社にスーツの裾の長さで悩むような、それくらいまっとうな日常を送っていたはずなのに。

見たこともない壁画、嗅いだことのないお香、聞いたことのない言葉。

それでも、不思議と意味が通じている。たぶんこれが、召喚というやつの効果なんだろう。長老が口に行っている言葉も、聞こえる音と意味が微妙にずれて感じられる瞬間がある。それでも理解できてしまうのが、逆に怖い。脳に直接、知らない言語の翻訳機が押し込まれたみたいな違和感だった。でも、それで？

光は、宿らなかつた。私はたぶん、聖女じゃない。間違って呼ばれてしまった、ただの一般人だ。

私はこれから、どうなるんだろう。

元の世界に戻れるのか。それとも、役立たずだとして、ここで放り出されるのか。聖女を呼ぶのに半年もかかったと言っていた。やり直しがきく儀式とは、とても思えない。

長老の背中を見つめる。彼の白い髭の先が、心なしか震えているように

見えた。

廊下の壁には、聖女らしき女性が光を放って魔物を打ち払う場面が、何枚もの絵となって描かれていた。眩しい金色の光、跪く人々、感謝の眼差し。絵の中の聖女は、皆、たおやかな金髪に紫水晶のような瞳をしていて、神秘的な微笑みを浮かべていた。神々しい存在として、はっきりと様式化されている。

全部、私には縁のないものだ。

私は黒い髪に、平凡な茶色の瞳。身長も平均より少し低くて、特に整った顔立ちでもない。背後を歩いてくる神官たちが、絵と私を見比べてどう思っているのか、考えるのも怖かった。

長い廊下の突き当たりに、両開きの扉が見えてくる。重厚な金属の扉には、見たこともない文字と紋様が刻まれていた。扉の前に立つだけで、身

体の芯が冷えていくような、不思議な圧を感じる。後ろをついてきていた神官たちが、扉の手前で歩みを止めた。中へ入るのは、長老と私だけのようだ。

その扉に手をかけながら、長老が低く呟いたのが、聞こえた。

「主よ……どうか、どうか、お慈悲を」

その祈りの声があまりに切実で、私の胸の奥が、嫌な予感でちりちりと痛んだ。お慈悲、という言葉。その言葉が向けられているのは、神様に対してなのか、それとも、これから明らかになる何かに対してなのか。

扉が、ゆっくりと開く。

立ち込めるお香の煙の向こうに、丸い祭壇のようなものが見えた。中央には、見たこともない文字が刻まれた水晶のような球体が据えられている。煙の合間から覗くその球体は、内側にぼんやりと淡い光を宿していて、ま

るで何かを待っているように、静かに脈打っているように見えた。

私の知らない、何かがそこに待っている。

そんな確信だけが、はつきりとあった。

扉の向こうの聖室は、思っていたよりもずっと狭い空間だった。

円形の床に、複雑な紋様が彫り込まれている。中央の祭壇の上に置かれているのは、私の頭ほどの大きさの水晶球。それを取り囲むように、七つの燭台が等間隔に立ち並んでいた。壁には窓ひとつなく、ただ青白い炎を灯した灯籠が、ゆらゆらと部屋全体を照らしている。空気は重く、息をするたびに胸の奥に薬草の甘い匂いが沈んでいくようだった。

「シオリ様、こちらの円の中に、お立ちくださいませ」

長老に促され、私は祭壇の前に描かれた小さな円の上に足を踏み入れた。

素足に伝わる石床の冷たさが、ふくらはぎを伝って這い上がってくる。膝が、まだ少し笑っている。

「これより、御身の魔力系統を視させていただきます。少し、しびれるような感覚があるかもしれませんが、ご辛抱を」

「は、はい……」

長老が水晶球に手をかざした。瞼を閉じ、低い声で何かを唱え始める。耳に届くのは、聞き取れない言葉の連なり。しかし不思議と、その声には何かを呼び起こすような響きがあった。

ぴり、と肌が痺れる。

最初は指先から、続いて手首、肘へと、細い電気のようなものが這い上がってきた。痛くはない。痛くはないのに、なんだか心の奥の柔らかい部分まで覗き込まれているような、嫌な感覚。私は無意識に長衣の胸元を握

りしめていた。

水晶球が、内側からほのかに発光し始める。

最初は淡い乳白色だった光が、ゆっくりと色を変えていく。青、緑、黄、橙……七色の光が水晶の中を泳ぐように渦巻き、やがてひとつの色に収束し始めた。

桃色だった。

淡い、桜の花びらのような桃色。長老の顔色が、それを認めた瞬間、目に見えてさっと変わった。閉じていた瞼がぱっと開かれ、その瞳が信じられないものを見るように水晶球を凝視する。

「これは……まさか」

声が震えていた。

水晶球の中で、桃色の光は徐々にその色を濃くしていく。淡い桜色から、



薔薇のような深い紅へ。そしてその色には、明らかに官能的な、艶めいた波が混じり始めていた。じわり、じわりと、まるで脈打つように。光は内側で渦を巻き、表面に浮かんでは沈み、まるで何かを誘うようにゆらゆらと揺らめいていた。

長老の額に、玉のような汗が浮かぶ。

他の神官たちもまた、水晶球の異変を遠巻きに察したらしい。聖室の外に控えていた数人が、扉の隙間から覗き込んで、息を呑む音が聞こえる。誰かが小さく「まさか」と漏らした。誰かが「あの色は、文献の記述と」と呟いた。空気がざわざわと、不穏な熱を帯びていく。

彼は何度も水晶球と私を見比べた。視線がさまよい、やがてゆっくりと、水晶球から離される。

「……シオリ様」

声が、絞り出すようだった。

「は、はい」

「御身の魔力は、確認いたしました。確かに、稀有なる聖力を秘めていらっしゃると思います」

その言葉に、ほっと胸を撫で下ろしかけて。

「ただし」

次の言葉で、私の身体はまた強張った。

「極めて、特殊な系統にございます」

「特殊、とは……？」

「申し上げにくいのですが」

長老は何度か言葉を探すように口を開いては閉じ、ようやく覚悟を決めたように顔を上げた。

「御身の魔力回路は、いわゆる『媒介型』と呼ばれる極めて稀な系統。さらにその中でも、過去千年で記録の残るのはわずか二例のみという、特殊中の特殊にございます」

「あ、あの、すみません、専門的なことはわからなくて……」

「平たく申し上げます」

長老はぐっと拳を握りしめ、私の目を真っ直ぐに見た。

「御身の聖魔法は、ある特定の感情の高まりによってのみ、発動いたします」

「特定の……感情？」

「左様にございます」

言葉を選ぶように、長老はわずかに視線を逸らした。

「『快感』と申しまする」

……。

頭の中で、その言葉が一拍遅れて意味を結んだ。

「えっ、と」

私はまだ笑っていた。たぶん、その言葉の意味を取り違えているに違いないと思って。

「あの、嬉しいとか、楽しいとか、そういう？」

「いえ」

長老は静かに首を振る。

「御身の魔力に反応していたのは、より身体的、より直接的な、性的な意味合いの快感にございます」

水晶球の中で、桃色の光がじわりとまた色を濃くした。

まるで、その言葉を肯定するみたいに。

……えっ。

顔が、一気に熱くなった。耳の縁まで、首筋まで、たぶん指先まで、全身がかつと火照る。視界がぐらりと揺れた。

「い、いえ、あの、ちょっと待ってください」

「シオリ様」

「ちょっと、ちょっと待って、待ってください、それって、それ……」

言葉が出てこない。

性的な、快感。

そんな、そんなの、聞いたこともない。漫画でも小説でも、聖女の魔法はみんな祈りで発動するものじゃなかったか。手を組んで、目を閉じて、神様に願って、それで眩しい光が出る。それが聖女の魔法じゃなかったのか。

なのに、なに、それ。

なんで、私だけ、そんな。

「過去の記録によれば、媒介型の聖女様は、その感情の高まりが頂点に達した瞬間、爆発的な聖力を発現させると伝わっております。一度発動すれば、通常の聖女の数倍に及ぶ浄化の力を、広範囲に及ぼすことが可能であると」

「で、でも、それって……」

「儀式が、必要になります」

長老は、深く深く頭を下げた。

「相手を、必要といたします。シオリ様お一人では、決して発動いたしません」

ぐらり、と本当に視界が傾いた。

冗談でしょう、と言えたらどんなに良かったか。けれど、長老の蒼白な顔と、冷や汗の浮かんだ額、そして何より水晶球の中で艶めかしく脈打つ桃色の光が、その言葉が紛れもない真実だと告げていた。

水晶球は今もなお、私の魔力の本質を映し続けている。あれが私だ。あの淫らな色をした光が、私の中に確かに宿っているもの。

目を逸らしたいのに、逸らせない。

まるで、自分の中の知らない部分を無理矢理見せつけられているような、そんな感覚だった。今日初めて会った人たちの前で、自分の身体の一番外にある、誰にも見せたくないものを暴かれてしまった。そんな気分。

私は、よろよろと一步あとずさる。

「お待ちを、シオリ様。お気を確かに」

「いい、嫌、嘘、嘘ですよ、嘘って言ってください」

「お気持ちは……痛いほど、お察しいたします」

長老の目には、本当に憐れみの色が浮かんでいた。

その憐れみが、かえって決定的だった。これは現実だ。本当に、本当に、私は、そんな魔法しか使えないのだ。世界を救うために、知らない誰かと、そんなことを、しなければならぬのだ。

「……っ」

涙が、勝手に滲んでくる。

長老は私を伴って、ゆっくりと聖室を出た。廊下で待っていた他の神官たちが、長老の表情を見て、すぐに何かを察したらしい。彼らの間にもさざ波のような動揺が広がっていく。

「ま、まさか、媒介型……？」

「いや、しかし、そんな、そんな」



「ご静粛に」

長老が低く制する。

「シオリ様には、しばし御部屋にてお休みいただく。子細は、後ほど」  
神官たちが慌ただしく動き出す中、私は別の年若い女性神官に手を引かれて、用意されていた一室に通された。

白い天蓋付きの寝台、繊細な彫刻の施された化粧台、大きな鏡。きっと客人として最上級のもてなしのつもりなのだろう。けれど、それを愛でる余裕など、あるはずもなかった。

女性神官が一礼して下がる。扉が閉まり、私は一人になった。

しばらく、立ち尽くしていた。

やがて崩れ落ちるように、寝台の縁に腰を下ろす。膝の上で、長衣の白い布が皺くちやに握りしめられていた。

……快感。

自分の中で、その言葉を反芻する。

嘘でしょう。嘘でしょう。嘘でしょう。何度繰り返しても、現実は変わらない。

私は、人並みにしか恋愛経験がない。最後に誰かと付き合ったのは、二年も前。社会人になってからは仕事に追われて、出会いもなかった。それで結構困っていなかったし、自分のペースで穏やかに暮らしていた。

夜、好きなドラマを観て、一人で笑って、お風呂に入って、ベッドに入る。それで充分幸せだった。誰かに肌を触れさせるなんて、しばらく考えたこともなかったし、考えたくもなかった。

なのに、なんで。

神様、もしいるなら、人選を完全に間違えてます。

膝を抱えて、寝台の上で身体を縮める。

誰と、どうやって。

頭に浮かびかけた想像を、慌てて振り払う。けれど振り払っても振り払っても、桃色の光が脳裏にちらついて消えてくれない。あんな淫らかな色をした、自分の魔力。

知らない男の人の手が、自分の身体に触れる。その手で、感じさせられる。光が宿るほどに、強く、深く。考えるだけで、ぞわりと背中が栗立った。怖いのか恥ずかしいのか、それとも別の何かなのか、自分でも区別がつかない。

頬がまた熱を持つ。

その時、扉の向こうから、慌ただしい足音と話し声が聞こえてきた。

「魔王軍の進軍開始は……半月後と」

「そんな、ではこのままでは、間に合わぬ……」

「王城に、早馬を。最も信頼に足る方を、ご指名いただかねば」

私は息を詰めた。

半月。

半月後には、その『相手』とやらが、決まってしまうのだ。

私の意思とは関係なく。世界の都合で。

自分の手のひらを、そっと見下ろす。

ここに光は、ひとかけらも宿らない。普通に念じても、祈っても、絶対に発動しない魔法。

……どうしよう。

それしか、頭に浮かばなかった。

窓の外では、見知らぬ世界の太陽がゆっくりと傾き始めていた。長く伸

びた橙色の光が、寝台の白いシートの上を斜めに切り取っていく。その光の中で、私は膝を抱えたまま、ただひたすらに、夕暮れが夜に変わるのを待っていた。

翌朝、私は王城へと召喚された。

神殿から差し向けられた馬車に乗せられ、王都の中央通りを抜けていく。窓の外を流れていくのは、石畳の道、煉瓦造りの家並み、色とりどりの天蓋を張った屋台。私の知っているどの観光地にも似ていない、けれど確かにそこに人々の暮らしがある景色。子どもがパンを齧り、商人が声を張り上げ、犬が荷馬車の影で寝そべっている。

平和な街だった。

そしてその平和は、半月後には脅かされる。私が、あの魔法を発動でき

なければ。

馬車の中で、私は何度も自分の手のひらを見下ろした。昨夜、ほとんど眠れなかった。考えれば考えるほど現実味が湧いてきて、考えなければ考えないで知らない天井が私を不安にさせた。

ようやく王城に着いた頃には、もう昼を過ぎていた。

白亜の城壁、磨き上げられた大理石の階段、両脇に整列する近衛兵たち。何もかもが、私の身に余りすぎていた。長老に手を引かれるようにして長い廊下を歩く間、息をすることすら遠慮がちになる。

すれ違う使用人や役人が、皆、ぴたりと立ち止まっては深々と頭を下げてくる。「聖女様」と呟く声がそこかしこから漏れる。視線に晒されることに、私はまったく慣れていなかった。会社では会議室の隅で議事録を取るのが定位置だった私が、なぜ今、こんなに大勢に注目されているのか。

それはもちろん、私の力ではない。私が背負わされた肩書のためだ。

謁見の間に通された。

高い天井、両脇に整然と並ぶ貴族たち、奥の段上に据えられた金の玉座。そこに座っているのは、銀髪に深い青の瞳をした、五十代半ばと思しき男性——この国の王だった。

長老に促されて、私は中央まで進み出る。深く、深く、頭を下げた。やり方なんて知らない。ただ、見よう見まねで足首を交差させて、長衣の裾をつまんでみる。それで合っているのかどうかすら、わからなかった。

「面を上げよ、聖女よ」

低い、よく通る声だった。

顔を上げると、王は厳めしい表情の中に、はつきりとした疲労を滲ませていた。眉間に深い皺。目の下に隈。きっとこの方も、半月後の侵攻のこ

とで、ろくに眠れていないのだろう。

「神殿より、子細は聞いておる」

王の声は、わずかに苦渋を含んでいた。

「異界より参られたばかりの御身に、このような任を強いるは、王として誠に無念である。しかし……国の存亡が、御身の御力にかかっておる」

「は、はい……」

「その上で、最も信頼できる騎士に、補佐を命じる。我が王国第一騎士団長――」

王が、玉座の脇に控えていた人物に視線を向けた。

「ディートハルト・フォン・アーレンベルク。前へ」

貴族たちの列の中から、一人の男が静かに歩み出てきた。

その瞬間、私は息をするのを忘れた。



銀色の髪。

月光を燃り合わせたような、淡くて冷たい銀。短く整えられたそれが、城内に差し込む光を受けて、ほんのわずかに揺れる。

磨き上げられた銀の鎧をまとった長身。広い肩、引き締まった腰、長い脚。歩く所作には一切の無駄がなく、靴音すらほとんど立てない。

そして、瞳。

彼が中央まで歩み出て、片膝をついて顔を上げた時、私は本当に身体が固まった。

深い、深い、蒼。

夜明け前の凍った湖を覗き込んだら、たぶんこんな色をしている。底が見えないほど澄んでいて、けれど何一つ熱を宿していない、冷たい蒼。

整いすぎた顔立ちだった。高い鼻梁、きゅっと結ばれた薄い唇、すつと

通った顎の輪郭。表情というものが、まったく動いていない。本当に、人形のように。

貴族たちの間から、ひそかなざわめきが始まった。

「氷の騎士団長が……」

「あの方が補佐役とは」

「女嫌いの噂は、本当だったか」

切れ切れに耳に届く言葉。氷の。女嫌い。その単語のひとつひとつが、なぜかちくりと胸に刺さる。

……あの人が。

胸の奥が、変な音を立てた。

あの人が、私の儀式の、相手なのか。

「ディートハルトよ。汝に命ずる」

王の声が、しん、と静まり返った謁見の間に響く。

「聖女シオリの儀式の補佐役として、その任を全うせよ。これは王命である」

「は」

ディートハルトが、深く頭を垂れた。

「謹んで、お受けいたします」

声まで、冷たく整っていた。低くて、よく通って、けれど抑揚がほとんどない。私はその声を聞いただけで、また心臓がぎゅっと縮んだ。

彼は片膝をついたまま、私の方へ顔を向けた。蒼い瞳が、真っ直ぐに私を捉える。

「聖女、シオリ様」

「は、はい！」

声が裏返ってしまった。慌てて口元を押さえる。

「ご無礼を、お赦してください」

彼はそう前置きしてから、淡々と告げた。

「任務として、誠実に遂行いたします。御身に苦痛を与えぬよう、最大限の配慮を尽くす所存です」

任務として。

誠実に。

その言葉が、ぱしゃりと冷たい水のように私の頬を打った。

……そう、これは、任務なのだ。

恥ずかしくて、彼の方を見られなかった。けれど見ない方が、もっと意識してしまう気がして、私はぎこちなく頷いた。

「よ、よろしくお願い、します」

ディートハルトは深く一礼して、立ち上がった。彼が動くたびに、銀の鎧が小さく金属音を立てる。その音すら、なぜか妙に意識されて仕方なかった。

謁見が終わり、私は一旦、城内に用意された一室へと案内された。

通された部屋で待っていたのは、年配の女官だった。彼女は私を見るなり恭しく頭を下げ、それから手早く動き始めた。

「シオリ様。本日の儀式に向けて、お支度をさせていただきます」

「し、支度、ですか」

「左様にございます。湯浴みと、それから儀式用のお召し物をご用意しております」

湯浴み。

そう、当然だ。これからそういうことが、あるのだから。

顔から火が出そうだった。

大きな浴室に通され、女官たちの手で身体の隅々まで丁寧に洗われた。香油の混ぜられた湯、薔薇の花びらが浮かんだ湯船。普段なら贅沢だと喜んだだろうそれらが、今日はただひたすらに恥ずかしさを増幅させる装置にしかならなかった。髪を洗われ、身体を拭かれ、肌に薄く香油を塗られる。私の素肌が、これから誰の前に晒されるのかを思うと、腿の内側まで熱が走った。

女官たちは慣れた手つきで、私の肩、背中、腰、太腿の付け根まで、丁寧に香油を擦り込んでいく。手のひらが触れるたびに、肌が小さく粟立つ。これは、私の身体ではない誰かのために整えられているのだ。今夜、彼の前で、私の身体がどう見えるかのために。

最後に、髪を絹のような布で何度も拭かれた。長い黒髪が、ふわりと甘

い香油の匂いを纏う。

白絹の儀式用の衣を着せられた。前回の長衣よりさらに薄く、肌の色が透けて見えそうな繊細な織り。胸元と腰のあたりに金糸の帯が結ばれているだけで、それを解けば簡単にはらりと落ちてしまう、そんな仕立てだった。

明らかに、すぐに脱がせる前提の衣装だ。

化粧台の前に座らされ、髪を結われる。化粧を施される。鏡の中の自分は、見たこともないほど整って、それゆえに見慣れない他人のようだった。

日が暮れていく。

女官に伴われ、私は再び神殿へと馬車で運ばれた。窓の外、王都の空が紫から藍へと染まっていく。等間隔に並んだ街灯に、一つずつ青白い炎が灯されていく。それを眺めていても、頭の中はずっと、銀髪の騎士のこと

でいっぱいだった。

あの人と、これから。

考えるたびに、心臓が勝手に跳ねる。怖いのか、それとも別の何かなのか、本当にわからなかった。

神殿に着くと、長老が出迎えてくれた。短く言葉を交わす間もなく、奥の聖室へと案内される。最深部の聖室は、昨日水晶検査をした部屋ではなかった。さらにその奥にある、儀式専用と思しき部屋。

扉が開かれる。

中央には大きな寝台が据えられていた。薄絹のシートが敷かれ、その上には何枚もの白い花卉が散らされている。窓は高い位置に設けられ、月光が斜めに差し込んで、寝台の上にちょうど青白い光の筋を作っていた。部屋の四隅には、太い燭台。柔らかな蝋燭の灯りが、空間全体を優しく揺ら



している。

お香の匂い。

甘く、けれど少し、何かに似た香り。媚薬とまではいかないにしても、心と身体を解きほぐすような、そんな効能のある香だと、長老が小声で説明してくれた。

聖室の中央に、彼が立っていた。

デイトハルト。

謁見の時に着ていた銀の鎧は脱ぎ、白いシャツと黒い隊服のズボンだけの、簡素な姿。それでも姿勢は寸分も崩れず、両手を後ろに組んで、まるで儀杖兵のように真っ直ぐに立っている。

扉が、私の背後でゆっくりと閉まった。

長老の足音が遠ざかっていく。それが完全に聞こえなくなった時、聖室

には、私と彼の二人だけが残されていた。

しん、と耳が痛いほどの静けさ。

燭台の蝋燭が、ぱちっ、と小さな音を立てる。自分の呼吸の音が、いつもより大きく聞こえる。彼の方からは、息遣いひとつ漏れてこない。本当に、この人は氷でできているんじゃないかと思うほどだった。

「シオリ様」

彼が、初めて口を開いた。

声はやっぱり、抑揚がなかった。けれど、すぐ近くで聞くと、思ってたよりも低くて、なぜか喉の奥が震えた。

「お辛い任にございます」

彼が、真っ直ぐに私を見ていた。

蒼い瞳に、初めて、ほんのわずかだけ、何かが揺れたように見えた。

「ですが、誠心誠意、務めさせていただきます」

ディートハルトが、ゆっくりと一步、私に向かって踏み出す。

燭台の灯りが、銀の髪をふわりと撫でた。

私は、立ち尽くしたまま、近づいてくる彼を見つめていることしかできなかった。

彼の長い指が、伸ばされる。

私の、震える手をとるために。

ディートハルトの長い指が、私の右手を、そっと取った。

手袋越しではない。彼はいつの間にか、白い儀礼用の手袋を外していた。剥き出しの指。私の指よりずっと長くて、節が高くて、けれど剣を握る男の手にしてはきれいに整えられている。その指先が、私の手の甲をす

るりと撫でた。

肩が、びくつと跳ねる。

「失礼を」

彼の低い声が、燭台の灯りごと空気を揺らした。

「お身体の力を、抜いていただけますか。緊張なさっていては、御身がお辛うございます」

「は、はい……」

頷いたものの、力なんて抜き方を忘れた身体は、ただ強張るばかりだった。

ディートハルトは私の手をとったまま、もう片方の手をゆっくりと持ち上げた。その手のひらが、私の頬に触れる。

ひやり、と最初は感じた。でも、すぐにわかった。冷たいのは、彼の手

じゃない。彼の手の体温に対して、私の頬が火照りすぎているだけだ。

彼の手のひらは、思っていたよりずっと温かった。広くて、硬くて、剣だこの感触がある。それなのに、私の頬を包み込む手つきは、まるで壊れ物を扱うように丁寧だった。

蒼い瞳が、すぐ近くにあった。

長い銀の睫毛が、燭台の灯りに照らされて、わずかに金色に光って見える。整いすぎた顔立ちが、こんなに近くにあると、現実感がない。彼が、ふっと、息を吐いた。その吐息が、私の唇にかかる。

「失礼、いたします」

唇が、重ねられた。

……っ。

最初の口づけは、本当に触れるだけだった。ほんの一秒にも満たない、

軽い接触。けれど、それだけで身体の芯がぞくりと震えた。彼の唇は思ったより柔らかくて、わずかに温かった。

離れた彼の蒼い瞳が、私を見つめている。

反応を見ているのだ、と気づいた。怖がらせていないか、嫌がっていないか。それを確かめてから、彼はもう一度、唇を寄せてきた。

二度目は、少しだけ深かった。

唇が重なり、上唇を、下唇を、彼の唇がゆっくりと食む。ちゅ、と小さな音が二人の間で立った。私の唇の輪郭をなぞるように、彼の唇が動く。頭の芯が、じんわりと痺れていく。

彼の手が、私の頬から首筋へと滑り降りた。指先がうなじをかすめる。それだけで、ぞくぞくっと背筋に電気が走った。

「ん……っ」

小さな声が、唇の隙間から漏れた。

その声に応えるみたいに、彼の舌先が、私の下唇をぺろりとなぞった。びっくりして、思わず唇を開いてしまう。その瞬間を待っていたかのように、彼の舌が、口の中に滑り込んできた。

「ん……っ、ふ……っ♡」

熱い。

彼の舌が、私の舌を絡め取って、ねっとりと擦り合わせる。くちゅ、くちゅ、と粘膜の擦れ合う音が、聖室の中にやけに大きく響いた。唾液が混じり合って、口の端から伝い落ちそうになる。それを、彼の指がそっと拭いた。

私の身体は、いつの間にか彼にもたれかかっていた。膝が、自分の体重を支えられないくらいに、ふにやりと崩れている。

ディートハルトは私を抱き抱えるようにして、寝台までゆっくりと運んでくれた。薄絹のシーツの上に、そっと下ろされる。散らされていた白い花卉が、ふわりと舞い上がって、また寝台の上に降り積もった。

彼は寝台に上がり、私のすぐ脇に膝をついた。

燭台の灯りが、彼の銀髪を揺らしている。蒼い瞳が、寝台に横たわった私を、上から見下ろしていた。

「儀式用の衣を、解かせていただきます」

「は……はい」

声が、もう普通に出ない。

彼の長い指が、私の腰に結ばれた金糸の帯にかかった。きゅっと結ばれていたそれが、彼の指の動きで、するりと一度で解けてしまう。たった一本の帯が解かれただけなのに、白絹の薄衣が、私の身体の輪郭からはらり



と崩れ落ちる。

胸元が、開いた。

反射的に、両腕で胸を隠そうとしてしまう。けれど、その手が、彼の大きな手によって優しく押さえられた。

「お見せください」

低い声で、彼は告げた。

「触れさせていただかねば、儀式は、進みませぬ」

ぎゅっと、目を閉じた。

頷くしかなかった。羞恥心と、そしてもっと別の何か——彼の真面目で誠実な口調に、なぜか抗いたくない気持ちが混じり合って、私はゆっくりと腕を解いた。

胸が、彼の眼前に晒される。

しん、と一瞬、彼が動きを止めた気がした。視線が、私の胸の上に注がれている。それを直視できなくて、私は顔を背けた。横向きになった枕に、頬がぎゅっと押し付けられる。

彼の手のひらが、ふわり、と私の左の乳房に重ねられた。

「あ……っ」

ふにゅん、と乳房が彼の手のひらの中で形を変える。

大きな手だった。私の胸を、片手で包み込んで、まだ余裕がある。彼の手のひらは温かくて、剣だこのある指の腹が、白い肌に対して妙にざらりと感じられた。

ゆっくりと、揉まれる。

ふにゅ、ふにゅ、ふにゅ。

最初は、ただ手のひら全体で、形を確かめるような動きだった。乳房の

柔らかさを掌で感じ取って、その重みを量って、ゆっくりと揉み込んでいく。

もう片方の胸にも、彼のもう一方の手が重ねられた。両胸を、それぞれの大きな手のひらに包み込まれて、ゆったりと揉まれている。

「ん……ふう……っ」

息が、勝手に乱れていく。

乳房を揉まれているだけ。ただ、それだけのはずなのに、揉まれるたびに身体の内奥にじんとしたものが溜まっていく。お腹の奥が、なんだか変な熱を持ち始めている。

ディートハルトの指の動きが、少しずつ変わっていった。

手のひら全体での揉み込みから、徐々に指先を使った動きへ。乳房の側面を、親指の腹で円を描くように撫でる。下から持ち上げるように手のひ

らで押し上げる。指の付け根を寄せて、乳房の中央へと寄せ集める。

「あ、あ……っ♡」

胸の頂きが、彼の指の動きに引っ張られて、ぴくぴくと震えた。

まだ、そこには触れられていない。なのに、もうずいぶんと尖ってしまっているのが、自分でもわかる。冷たい空気と、彼の視線と、揉まれる刺激で、勝手に硬く立ち上がってしまった。恥ずかしくて顔が燃えるようだった。

「……硬く、なっておられますね」

彼の声が、囁くように落ちてきた。

別に揶揄しているわけじゃない。ただ事実を確認しているだけの、淡々とした声。それなのに、その響きが、私の身体の奥をきゅんと締め付けた。

「い、言わな……っ、で、ください……」

「ご無礼を」

彼が、わずかに首を傾けた。

そして、ゆっくりと、人差し指の腹を、私の乳首にあてがった。  
ぴくっ、と身体が大きく跳ねた。

「ひあっ♡」

たった、それだけで。

指の腹が、ほんの軽く、つん、と乳首の先端に触れただけで。私の口から、聞いたこともない甘い声が漏れていた。慌てて手のひらで口を覆うけれど、もう遅い。彼の蒼い瞳が、わずかに見開かれている。

「……っ」

彼の喉が、こくりと小さく動いた。

気のせい、だろうか。任務として遂行している彼が、私の声に、何か反

応した？

考える間もなく、彼の指が動き始めた。

くりくり♡、くりくり♡。

乳首の先端を、人差し指の腹で、優しく、けれど執拗に転がす。最初は遠慮がちだった動きが、徐々に確かさを増していく。私の反応を見ながら、彼は指の動きを変えていった。

指の腹で円を描くように。

親指と人差し指で、つまんで、軽く扱くように。

爪の先で、つん、と先端を弾くように。

くにゅ♡、くにゅ♡、ぴん♡、こりっ♡。

彼の指が動いたたびに、乳首はますます硬く、敏感になっていく。最初はぶつくりと膨らむだけだった先端が、やがて充血して、乳輪ごと盛り上が

ってきているのが、自分でもわかった。色も、どんどん濃く、紅くなっている気がする。

「あんっ♡、あ、あっ♡、んん……っ♡」

声が、止まらなかった。

手のひらで口を塞いでいても、隙間からどうしても漏れてしまう。聞こえてしまう。彼に、聞こえてしまっている。それが恥ずかしくて、たまらない。

乳首を扱かれるたび、お腹の奥に、じわ、じわ、と熱が溜まっていく。胸を弄られているだけのはずなのに、なぜかもっと下、ずっと奥の方が、勝手に疼き始めていた。腿の付け根が、もぞもぞと落ち着かない。きゅつと脚を擦り合わせると、また別の熱が立ち上ってきて、私はとっさに身を振った。

ディートハルトの動きには、不思議な熱があった。

彼自身は、相変わらず無表情だ。整った顔は、ほとんど崩れていない。けれど、私の乳首を弄ぶ指の動きには、確かに何かが籠もり始めている。最初の事務的な触れ方とは、もう違う。私の反応を見ながら、どこを、どう触れば、どんな声が出るのかを、確かめているような。

「シオリ様」

ふいに、彼が私の名を呼んだ。

名前を呼ばれただけで、お腹の奥がきゅん、と疼いた。

「は、い……っ？」

「お顔を、こちらに」

言われるままに、頬を押し付けていた枕から、ゆっくりと顔を彼の方へ向ける。涙で滲んだ視界に、彼の整った顔が映った。



その瞬間、彼が屈み込んだ。

胸の頂きに、彼の唇が、触れた。

「ひゃう……っ♡！」

指とは、まったく違う感触だった。

濡れた、温かい、柔らかいもの。それが、ぴったりと乳首を包み込む。

彼の唇に挟まれて、舌先がちろちろと先端をくすぐる。

ぞくぞくぞくつと、背中を電気が走った。

私の腰が、勝手にシーツの上で跳ね上がる。彼はそれを大きな手で押さ

えながら、ちゅう、と乳首を強く吸い上げた。

「やあっ♡、あ、あああっ♡！」

甲高い悲鳴のような声が、聖室の天井に響き渡る。

ディートハルトの蒼い瞳が、私の乱れる姿を、じっと見つめていた。氷

だったはずのその色が、今、確かに、ほんの少しだけ、揺らいでいるように見えた。

胸への愛撫は、それからも続いた。

ディートハルトの唇が、左の乳首を含んだまま、ゆっくりと舌先で先端を転がす。ちろちろ、ちろちろ、と濡れた感触が乳輪をなぞり、ちゅうつと強く吸われたかと思うと、ふいに歯の縁で甘く挟まれる。そのたびに私の身体は、シーツの上で魚のように跳ねた。

もう片方の乳首は、彼の指先がずっと弄び続けている。親指と人差し指でつままれ、こりこり♡、こりこり♡、と擦り合わされる。両方同時に責められて、私の喉からはひっきりなしに甘い声が漏れていた。

「あ、あ……っ♡、んん……っ♡、やあ……っ♡」

涙で滲む視界の端で、銀色の髪が揺れている。

彼の口の中で、左の乳首はすっかり唾液まみれになっていた。乳輪の縁まで、つやつやと光って濡れている。彼の唇が離れた瞬間、ぴんっと尖った先端が空気に晒されて、その温度差に思わず腰が浮く。

ディートハルトは、ようやく顔を上げた。

彼の唇の端に、銀色の唾液の糸がきらりと光って、それが口元から私の乳首までを繋いでいた。蒼い瞳は、私の乱れた姿をじっと見下ろしている。

「シオリ様」

低く、彼が呼んだ。

声の響きが、さっきまでとほんの少しだけ違っていた。任務として淡々と告げるあの声に、ほんの僅かな掠れが混じっている。

「下半身に、触れさせていただきます」

その宣告に、頭が真っ白になった。

言葉の意味は、わかる。わかるけれど、いざはつきりと告げられると、心臓が口から飛び出しそうになる。

「は、はい……」

声は、もうほとんど吐息になっていた。

ディートハルトは、ゆっくりと身体の位置を下げていった。私の脇に膝立ちになっていた彼が、寝台の足側へと移動する。彼の手のひらが、私の左の足首にそっと触れた。

ぴく、と足指が震える。

彼の指は、足首から、ふくらはぎへ、膝裏へと、優しくゆっくりと這い上がっていった。指の腹で、肌の上をつう、と撫でるだけ。それなのに、その軌跡を辿られているのが手に取るようにわかって、ぞくぞくっと産毛

が逆立った。

「ひゃ……っ、ん……っ♡」

膝裏。

そこを、指の背で、ふっ、と撫でられた瞬間。私の腿が、勝手にきゅっと閉じてしまった。膝裏なんて、自分でも触れたことがない場所だ。そんなところに、こんなに敏感な感覚があったなんて、知らなかった。

デートハルトは、私の閉じてしまった膝に、両手をかけた。

「お脚を、開いていただきます」

また、淡々とした宣告。

でも、その手の力は、ほとんど力が籠もっていなかった。少しでも私が抵抗すれば、すぐに緩んでしまうような、優しい開かせ方。それが、かえって私の中の何かを溶かした。私はゆっくりと、自分から脚の力を抜いた。

膝が、左右にぱたりと開かれていく。

白絹の薄衣はとづくに腰から下ではだけて、太腿の付け根まで露わになつていた。下着——こちらの世界の、紐で結ぶだけの簡素な布——が、まだ唯一、私の最後の場所を覆っている。

ディートハルトは、しばらく動きを止めていた。

彼の蒼い瞳が、私の脚の付け根に注がれているのが、視線の熱でわかる。直視できなくて、私は片腕で目元を覆ってしまった。

「失礼を」

短く彼は告げて、私の太腿の内側に手のひらを滑らせた。

太腿の、内側。

付け根に近い、ほとんど誰にも触れさせたことのない、白くて柔らかい場所。彼の指の背がそこを、すつ、と一筋なぞっていく。

「ひうつ♡」

甲高い声が、勝手に飛び出した。

くすぐったいような、けれどもっと別の、お腹の奥がきゅんと反応してしまうような、変な感覚。彼の指は、何度もその場所をなぞった。すり、すり、と指の腹で。つつ、と指の背で。爪の先で、ほんの軽く線を描くように。

「あっ♡、あ、あ……っ♡、そこ……っ♡」

もぞもぞと腰が動いてしまう。

太腿の内側を撫でられているだけで、お腹の奥に、じわっ、じわっ、と熱い何かが集まってくる。それが、布越しにわかるくらいに、下着の中をじつとりと濡らし始めていた。

彼の指は、付け根のすぐそばまで来ては、また膝の方へと戻っていく。

何度も、何度も。焦らされている、と気づくのに時間はかからなかった。指の腹が、下着の縁ぎりぎりまで来てから、ふっと方向を変える。そのたびに、私のお腹の奥がきゅんと締まって、勝手に腰が彼の指を追いかけてしまう。

恥ずかしい。

それなのに、もっと、もっと、と身体が訴えてしまう。脚の付け根が、じんじんと脈打って、自分でも触れたことのない場所が、彼の指を欲しがっている。

ディートハルトの指は、徐々に、その『中心』へと近づいていった。

太腿の内側から、付け根の窪みへ。下着の縁を指の腹で、すっ、と一度なぞる。それから、布越しに、私のそこを、軽く触れた。

くちゅ。



……粘ついた、小さな音がした。

ぼっ、と顔から火が出た。

濡れている。下着の上から触れられただけなのに、もうその布が、はつきりと湿っている。彼の指先に、その粘り気が、確実に伝わってしまった。いるはずだった。

「い、いやっ、見ない……で、ください……っ」

「お見せ、ください」

彼は静かに、けれどはっきりと、繰り返した。

「これは、御身の身体が、正しく反応している証にございます」

……正しく反応。

その言葉が、どこか私の羞恥を救ってくれる気がした。彼は私を貶めているわけじゃない。儀式のために、必要なことを、必要なだけ、誠実にや

ろうとしてくれている。

彼の指が、布越しに、ゆっくりと割れ目をなぞった。

ぬる、ぬる、と布の表面で、湿った粘り気が指の動きについてくる。

「あんっ♡、あっ♡、ああ……っ♡」

布越しの刺激は、もどかしいくらいに優しくて、けれどそれが逆に、奥にどんどん熱を溜めていった。腰が勝手ににもじもじと揺れてしまう。

デイトハルトの指が、ふいに動きを変えた。

下着の縁に指をかけ、ゆっくりと脚から抜き取っていく。私はぎゅっと目を閉じた。布が太腿を滑り落ち、膝を越えて、足首から外される、その一連の感触のすべてが、たまらなく恥ずかしかった。

最後一枚が、消えた。

彼の前で、私の身体は、もう何ひとつ隠すものを持っていなかった。

しん、と一瞬、聖室の空気が止まった気がした。

彼が、息を、呑んだ。

……今、確かに、そうだった。

淡々と任務をこなしていたはずの彼の喉から、明らかに、息を呑む音が、目元を覆っていた腕の隙間から、そっと様子をうかがう。彼の蒼い瞳は、私の脚の付け根に釘付けになっていた。氷だったはずの色が、今、確かに揺らいでいる。睫毛が、わずかに震えている。

でも、それは一瞬のことだった。

彼はすぐに表情を整え、片手で私の太腿を内側から押し開いた。

彼の長い指が、私の秘所に、初めて直接触れる。

くちゅ……っ。

粘膜の音が、はつきりと立った。

「ひっ♡、あ、ああ……っ♡！」

布越しとは、まるで違う感触だった。

彼の指の腹が、濡れた割れ目を、ゆっくりと一度だけ、上から下へ、なぞった。それだけで、私の身体の奥から、新たな愛液がとろりと溢れ出すのがわかる。

「ぬるぬる……でございますね」

ディートハルトの声が、ほんのわずかに、掠れていた。

彼の指は、もう一度、ゆっくりと割れ目を上から下へとなぞった。今度はさっきよりも丁寧に、形を確かめるように。割れ目の縁、その奥の柔らかな襞、入口の浅いあたりまで、指の腹で、ぬる、ぬる、と確認していく。

くちゅ♡、ぬちゅ♡、くちゅっ♡。

粘った音が、聖室に響き渡る。

恥ずかしいのに、その音が、自分の身体から立っているという事実が、私をますます濡らしていく。彼の指が動いたたびに、お腹の奥が締め付けられるように疼いて、また新しい愛液が溢れ出すのがわかった。

「あぁっ♡、あ、あっ♡、んっ♡、んう……っ♡」

彼の指が、割れ目の上の方で、止まった。

包皮に包まれた、小さな膨らみ。そこを、指の腹で、ゆっくりと、ゆっくりと、円を描くように撫で始める。

くるくる♡、くるくる♡。

「ひぁっ♡！」

悲鳴のような声が出た。

そこを直接刺激されたのは、初めてだった。彼の指は包皮の上から触れているだけ。それなのに、その内側で、何かがぷくっ、ぷくっ、と膨らみ

始めている感覚があった。じわじわと熱が集まってきた、包皮の中で、固く、ぷっくりと、勃ち上がってくる。

ディートハルトは、私の反応を確かめながら、指の動きを変えていった。円を描くように、ゆっくり、ゆっくりと。

包皮の上から、軽く、つんっ、つんっ、と先端を押すように。

二本の指で、左右から優しく挟み込むように。

そのたびに、私の腰はびくびくと跳ねて、勝手にシーツを蹴ってしまう。足の指先がきゅっと丸まって、また伸びる。お腹の奥が、限界まで張り詰めて、何かを欲しがっている。

くりくり♡、くりくり♡、つん♡、つん♡。

包皮越しの刺激だけで、もう涙が止まらなかった。

やがて、その膨らみが包皮を押しつけて、つん、と先端を覗かせた。

デートハルトの指の腹が、その剥き出しになった先端に、初めて直接触れた。

「ひううつ♡！！や、やあ……っ♡！！」

脳天まで、突き抜けるような刺激だった。

反射的に腰が浮き上がる。彼はそれを、もう片方の手で、優しく、けれどしっかりと、寝台に押し戻した。

彼の指の腹が、剥き出しのクリトリスを、くにゅ、くにゅ、と転がし始める。

涙が、勝手にぼろぼろと零れ落ちていった。

頭の中が、白く濁っていく。下腹の奥に、これまでとは比べ物にならない熱がぐるぐると渦を巻いている。彼の指の動きに合わせて、お尻の下の方、自分から溢れた愛液でじわりと濡れていくのが、はっきりとわ

か  
っ  
た。  
。